

高校教科「情報」履修入学者の実態と短期大学の情報教育の効果

菊地 紀子*

宮寺 庸造**

横山 節雄**

帝京短期大学*

東京学芸大学**

Effect of computer literacy education of junior college

Noriko KIKUCHI*

Youzou MIYADERA**

Setsuo YOKOYAMA**

Teikyo Junior College*

Tokyo Gakugei University**

Summary

The students who have studied subject "Information Study" in the high school entered a junior college in 2006. Freshmen's computer literacy skill was investigated in this paper. The finishing situation was various. The half of the students answered that computer is difficult and hate. Ten percent of the students were not able to do Roman character input. The half of the students were not good at the word-processing software. But the student wants to try "a certificate examination for word processor". Therefore, current computer literacy education was done. As a result, the students gained the confidence of the computer literacy skill.

要旨

本研究は、2006年度に高校教科「情報」履修入学者を迎えたため、どの程度の履修状況であるのか、その実態を調査した上で行った、短期大学での情報教育の効果を明らかにしている。

実態調査の結果、履修状況は様々であり、コンピュータを使ったことがない学生もいた。また、コンピュータに対する印象を「むずかしそう」と「嫌い」と答えた者が合わせて半数を超えていた。ローマ字入力が「できない」と「自信がない」と答えた者を合わせると1割強であった。アプリケーションソフトの使用に関しても、ワープロソフトを使うことが「できない」と「自信がない」と答えた者は合わせて半数を超えていた。しかし、「ワープロ検定」を取得したくないと明確に意思表示をしている学生は、2割弱であった。また、「ワープロ検定を持っているとこれから社会に出て役に立つと思うか」という問に対しては、8割に及ぶ学生がそう思うと答えていた。

したがって、学生のスキルの差に配慮した「ワープロ検定」取得を目標とするこれまでの情報教育を実施した。

その結果、コンピュータの操作技能について、学生に自信をつけさせることができたことを明らかにしている。

1. はじめに

文部省主催で「情報処理教育研究集会」が始められたのは、1988年であった。対象範囲は「情報教育(情報を専門とする学科の専門科目の授業を除く)を担当する教職員」となっていた。それから19回目を迎える2006年には「情報教育研究集会」と改名され、対象範

囲の規定もなくなった。講演件数も当初35件であったが、年々増加し2006年度は252件に及んだ。その中にあって、2006年度は高校教科「情報」履修入学者を迎えた年ということもあり、学生の実態調査や高校への調査、大学授業への効果に関する報告は、総発表件数252件中33件に及んでいる。

大学における2006年度入学者の調査と、それまでの

調査の比較研究から、異口同音に両者に関して極端な差はなく、これからも大学ならではの情報教育の必要性が報告されている^{1)~27)}。

また、短期大学においては、検定試験の受験結果や²⁸⁾、2006年度入学者へのアンケート調査から、これまでの入学者との比較を行い、コンピュータの利用実態や高校教科「情報」の履修内容、学生の意識の様態等が報告されている^{29) 30) 31)}。さらに、高等学校及び教科「情報」担当教員に対する調査から、生徒の格差や教員の負担といった初期の大学での情報教育と同じような実態が報告されている³²⁾。学生の心理的側面から、2006年度入学者の習熟度の自己評価やコンピュータに対する効力感の様態が報告されているものもある³³⁾。

帝京短期大学（以下本学という）でも情報教育を始めた1985年度から現在まで、試行錯誤の中で情報教育を進めてきた。その間、学生の実態調査や履修時期・期間による効果、検定取得と入力文字数の関係等、様々な角度から情報教育の効果について研究を進めてきた^{34) 35) 36) 37) 38) 39)}。

1993年度には中学で「情報基礎」が始まり、その入学者を迎える1996年度にその実態を調査した。その結果、7領域中から4領域が選択必修という履修形態であり、すべての入学者が履修しているとは限らなかった。

2006年度は、高校で新設された教科「情報」を履修してきた入学者を迎える初めての年である。

中学の「情報基礎」が技術・家庭という教科の中の1つの領域に過ぎなかったことに対して、高校の「情報」は、1つの教科であり、全員が必修という位置付けである。

したがって、どの程度の情報処理技能が身についているのかを把握した上で、短期大学での情報教育を進める必要がある。

そこで、2006年度新入生に対し、どの程度の履修状況であるのか、その実態を調査した。その上で、情報処理技能の修得過程を検討し進めた、短期大学での情報教育の効果について報告する。

2. 研究の目的

研究の目的は、以下の2点である。

- (1) 2006年度入学者の実態を調査し、情報処理技能の習得状況を明らかにする。
- (2) 学生の自己認識の変容と情報処理技能の習得状況により、短期大学の情報教育の効果を明らかにする。

3. 研究方法

調査の詳細について述べる。

- (1) 調査期間

表1 情報基礎演習カリキュラム

回数	内容
1	受講するに当たって（学習課題・学習計画）概要説明、機器構成、Web Campus 説明、自己認識調査アンケート、教材配布
2	ソフトとハード、速度及びビジネス文書編集テスト、印刷、FDフォーマット、タイピング練習、さくっとマスター
3	小テスト予告、手紙文とビジネス文書の違い、検定3級合格基準、準2級文書作成、文節変換、10分入力練習、印刷、入力ミステック
4	タイピング練習、さくっとマスター、小テスト：ローマ字、指使い、キーボード表、10分入力練習、準2級文書作成
5	タイピング練習、さくっとマスター、小テスト10分入力練習、準2級文書作成、検定予告
6~7	検定申込み、さくっとマスター10分間入力練習、準2級文書作成
8~11	タイピング練習、さくっとマスター、小テスト10分入力練習、準2級文書作成
12	タイピング練習、さくっとマスター10分入力練習、準2級文書作成
13	日本語ワープロ検定試験
14	お礼状、ネットワークモラル、自己認識調査アンケート
15	単位認定最終試験、速度、ビジネス文書編集テスト、ビジネス文書構成テスト

2006年度情報基礎演習前期15回の授業を対象とした。授業内容の概略を表1に示した。

(2) 2006年度入学者の実態調査

①調査項目

表2 教育システム情報学会による全国調査用紙

No.	問 い	選 択 肢
1	コンピュータを使ったことがありますか？ 使いはじめは？	① 高校入学以前に、学校で ② 高校入学以前に、学校以外で ③ 高校入学後に、学校で ④ 高校入学後に、学校以外で ⑤ これまで使っていない
2	高等学校で教科「情報」の科目を履修しましたか？（複数選択）	① 情報Aを履修した ② 情報Bを履修した ③ 情報Cを履修した ④ その他の科目を履修した ⑤ 履修していない
3	高等学校で教科「情報」の授業をいつ行いましたか？（複数選択可）	① 1年生で行った ② 2年生で行った ③ 3年生で行った ④ 行っていない
4	高等学校での情報の授業の満足度を評価ください	① 大変満足であった ② まあ満足であった ③ 普通 ④ やや不満であった ⑤ 大いに不満であった ⑥ 履修していない
5	現在、コンピュータについて、どんな印象をもっていますか？	① 好き ② おもしろそう ③ むずかしそう ④ 嫌い ⑤ その他
6	Webページの閲覧について A 掲示板等での不特定多数の人とのコミュニケーション B ネットオークション、チケット等の購入	① AB両方の用途で使っている ② Aの用途では使うが、Bの用途では使わない ③ Aの用途では使わないが、Bの用途では使う ④ 閲覧はするが、ABの用途では使っていない ⑤ Webページ閲覧はしていない

7	Key入力（ローマ字入力）ができますか？ 学校で習いましたか？ （複数選択可）	①できる ②大体できる ③自信がない ④できない ----- ⑤高校で習った ⑥小学/中学で習った ⑦習っていない
8	ワープロ（Word等）ができますか？ 学校で習いましたか？ （複数選択可）	①できる ②大体できる ③自信がない ④できない ----- ⑤高校で習った ⑥小学/中学で習った ⑦習っていない
9	表計算（Excel等）ができますか？ 学校で習いましたか？ （複数選択可）	①できる ②大体できる ③自信がない ④できない ----- ⑤高校で習った ⑥小学/中学で習った ⑦習っていない
10	プレゼンテーション（PowerPoint等）ができますか？ 学校で習いましたか？ （複数選択可）	①できる ②大体できる ③自信がない ④できない ----- ⑤高校で習った ⑥小学/中学で習った ⑦習っていない
11	Webページ作成ができますか？ 学校で習いましたか？ （複数選択可）	①できる ②大体できる ③自信がない ④できない ----- ⑤高校で習った ⑥小学/中学で習った ⑦習っていない

調査項目は、コンピュータの使用経験や教科「情報」に関すること等、教育システム情報学会による全国調査をもとに実施した。質問紙を表2に示した。

②調査対象者

調査対象者は、2006年度入学者249名である。

③調査方法

調査方法は、情報基礎演習第1回目の授業時に、マークシートによる回答選択式により実施した。

(3) 情報教育の効果

①調査項目

調査項目は、以下の二つである。

1つは、これまでの情報教育内容を100の質問項目とした自己認識調査である。もう1つは、ビジネス文書の編集技能を問うビジネス文書編集テストである。この2つの調査を実施することにより、実際のテストという形で実施することにより、学生自身の自己認識を客観的に裏付けるものである。

②調査対象者

自己認識調査の調査対象者は、情報基礎演習第1回目と第14回目に出席した215名である。

ビジネス文書編集テストの調査対象者は、情報基礎演習第2回目と第15回目に出席した227名である。

③調査方法

自己認識調査の調査方法は、情報基礎演習受講前後に、マークシートによる回答選択式により実施した。情報基礎演習の授業内容であるコンピュータの操作やビジネス文書の編集技能、ネチケットやワープロ検定等に関する100の質問項目に対して、「1全くそう思わない」を1点、「2あまりそう思わない」を2点、「3どちらともいえない」を3点、「4そう思う」を4点、「5とてもそう思う」を5点の5点尺

度で測定した。

ビジネス文書編集テストの調査方法は、情報基礎演習受講前後に、ビジネス文書の編集技能を測るための編集テストを実施した。この二つの調査をもとに、情報基礎演習受講前後のビジネス文書編集技能及び学生の意識の形態について考察する。

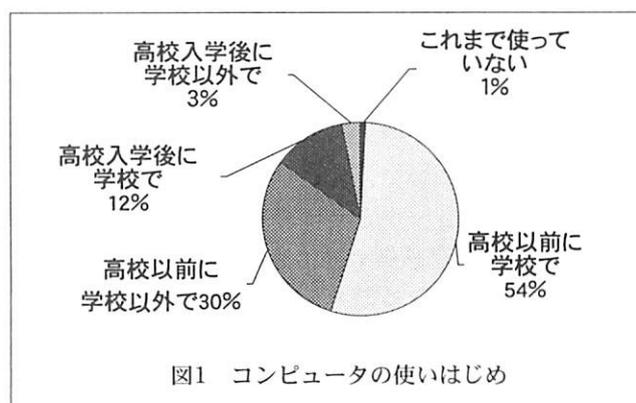
4. 結果及び考察

(1) 2006年度入学者の実態調査

2006年度入学者は、2003年度に高校教科「情報」が始まってから初めての入学者となる。そのため、これまでの入学者とは異なり、一定のスキルすなわち「情報機器や周辺機器の基本操作」、「キーボード操作」などが身につけていることが想定される。そこで、教育システム情報学会による全国調査をもとに、回答選択式によりアンケート調査を実施した。その調査項目のうち、本研究が対象とした情報基礎演習の実践過程と関連のある以下の4項目について考察した。

①コンピュータの使いはじめ

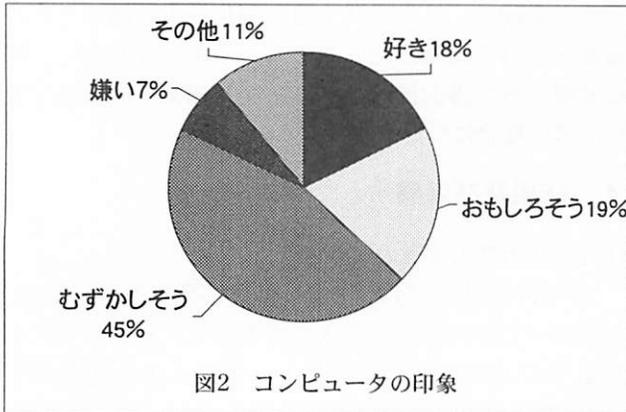
コンピュータの使いはじめを図1に示した。



この結果から特筆すべきことは、コンピュータを使ったことがないと答えた学生がいたことである。1名は通信制高校卒業生であり、1名は高校の内申書には情報Bを履修したことになるが、本人の申告ではコンピュータを使ったことがないということであった。また、割合としては少ないが、社会人入試制度もあり、既卒者や大学検定試験入学、通信制高校卒業生が1割弱おり、高校教科「情報」を履修していない学生がいることがわかった。さらに高校の内申書では高校教科「情報」を履修していることになっているにもかかわらず、履修していないと答えたり、「情報」AかBかCかわからないから答えられないと申告したりと、データの整合性を考慮すると半数近くのデータで不備が見つかるといった状況であった。本人たちの記憶の曖昧さゆえと考えられたが、2006年秋高等学校での未履修問題がニュースとなり、始まったばかりの高校教科「情報」の履修状況は様々であることが示唆された。

②コンピュータの印象

コンピュータの印象を図2に示した。



コンピュータの印象を、「好き・おもしろそう」を積極的印象、「むずかしそう・嫌い」を消極的印象として割合を比較してみると、積極的印象が37%、消極的印象が52%で、消極的印象が半数強という結果であった。

これは、図1のコンピュータの使いはじめの調査結果において、高校以前に学校や学校以外で使ったことがあると答えた者が84%であることから、高校での情報の授業によって好き、嫌いの印象になったと考えるよりもむしろ、高校での情報の授業を受けるより以前に、コンピュータに対して持っていた印象とも考えられる。なぜならば、原田ら³³⁾の高校教科「情報」履修入学者に対する調査において、教科「情報」の授業を受ける前に十分コンピュータを使っていた人ほど大学入学時点での習熟度自己評価や効力感が高く、教科「情報」を通して授業前にある効力感の差は埋まりにくいことが予想されるという報告があるからである。

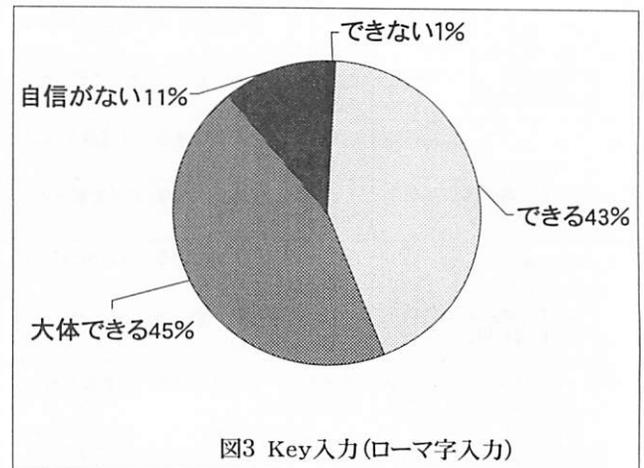
何れにしても、コンピュータに対して、積極的に関わろうとする姿勢と結びつく印象でないことは、確かなことである。

翻って現実を考えたとき、就職のエントリーシートの入力から始まり、コンピュータの操作は、避けては通れない時代となっている。ここで筆者らは、コンピュータの操作技能について、「できない→苦手意識→コンピュータは嫌い→興味関心がなくなる→使いたくない」ということは、避けたいと考えている。全ての学生が積極的にコンピュータを道具として使いこなし、学業を終え社会人となってからも、持続的・主体的にコンピュータと関わる姿勢を育成することが、最も大切なことではないかと考える。

③ローマ字入力

ローマ字入力ができるかどうかについて、図3に示した。

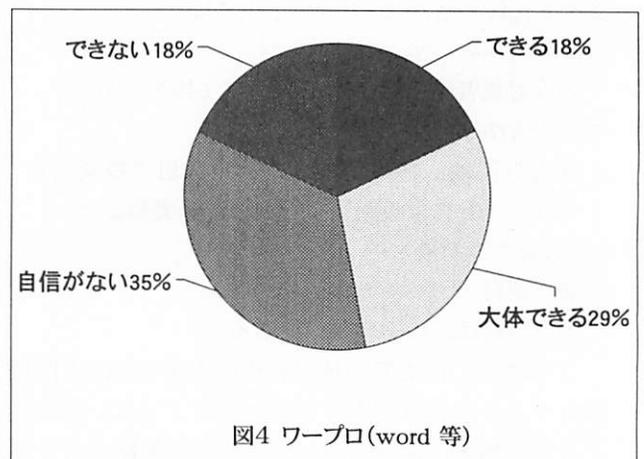
ローマ字入力ができるかどうかでは、9割近い学生は「できる」、「大体できる」と答えていた。しかし、「自信がない」と答えた者が1割強おり、少ない数では



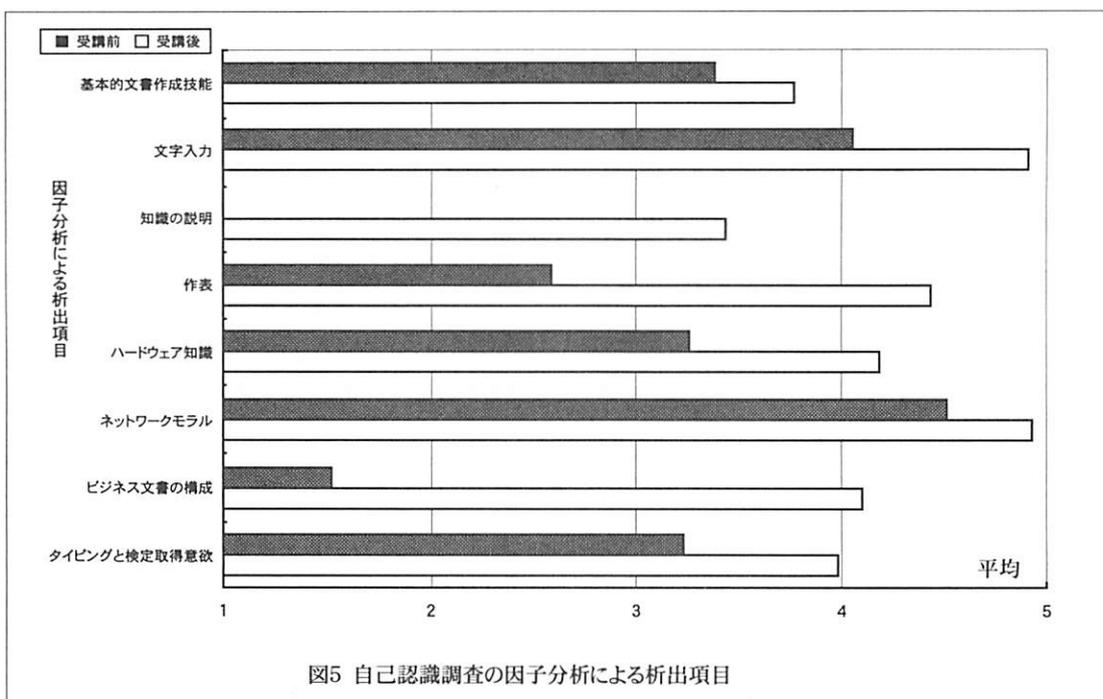
あるが、ローマ字入力に不安を持っている者がいることがわかった。ローマ字入力が「できない」と答えた者は、短大入学までにコンピュータを使ったことがないと答えた者で、当然のことながら全てのアプリケーションソフトも使うことが「できない」と答えていた。

④ワープロ

ワープロができるかどうかについて、図4に示した。



ワープロができるかどうかでは、5割弱の学生は「できる」、「大体できる」と答えていた。しかし、「自信がない」、「できない」と答えた者が5割強おり、教育の必要性が示唆された。データの整合性が取れた者の中で、ローマ字入力に「自信がない」と答えた者の中に、アプリケーションソフトを使うことが「できる」と答えた者はいなかった。また、ワープロソフトを使うことに「自信がない」と答えた者の中に、その他のアプリケーションソフトを使うことが「できる」と答えた者はいなかった。これらのことからコンピュータを使う上ではキーボード操作が基本であり、ローマ字入力ができないあるいは自信がないことは、アプリケーションソフトを使うことにも影響を及ぼしていることが示唆された。また、ワープロソフトを使うことに自信がないことは、その他のアプリケーションソフトを使うことにも影響を及



ぼしていることが示唆された。

したがって、ローマ字入力やワープロソフトの使用に関し、自信を持たせることができれば、その他のアプリケーションソフトも自信を持って使うことができるようになるのではないかと考えられた。

(2) 情報教育の効果

情報教育の効果は、学生自身の自己認識と客観的評価である編集テストの結果により考察した。その際、学生の自己認識は、データ分析による数量的調査と、受講後の自由記述による質的調査により検討した。

① 自己認識調査

情報基礎演習受講前後に、自己認識調査を行い、授業内容に関する100の質問項目に対し、因子分析を行った。

分析の結果、受講後には「基本的文書作成技能」、「文字入力」、「知識の説明」、「作表」、「ハードウェア知識」、「ネットワークモラル」、「ビジネス文書の構成」、「タイピングと検定取得意欲」の八つの因子が確認された。これらの因子の平均をグラフにしたものは、図5に示すとおりであった。100の質問項目の因子分析の結果から明らかになったことは、受講前に比べ受講後は、因子構造に変化があり、析出される項目が7因子から「知識の説明」が加わり8因子に増え、因子構造の様態も厳密さが増した。また、すべての析出項目において、図5に示すとおり平均3を超えていた。

情報基礎演習受講前後の自己認識調査の中央値と平均とSDを表3に示した。

受講前と受講後では、中央値の間に5%水準で有意差が認められた。 $(z = -12.6871, p < .05)$ 受講後は受講前に比べ、100項目の合計点である中央値は高く、SDは小さくなった。

表3 2006年度情報基礎演習受講前後の100の質問項目中央値、平均、SD

	受講前	受講後
中央値	316	425
平均	314.39	417.41
S D	60.78	43.27

(5点尺度：最低100～最高500の数値)

したがって、情報基礎演習を受講することによって、学生自身ができるようになった、わかるようになったと考えていることが示唆された。

因子分析による析出項目の中でも、「ビジネス文書の構成」に関しては、情報基礎演習受講前には、平均1.52であり、高校で新設された教科「情報」を履修してきた者であっても、「ビジネス文書の構成」に関しては未学習ということが明らかとなっていた。それが、受講後には平均4.11となった。未学習であった者が授業を受け、ビジネス文書の構成について、受講前より受講後の方がわかる者が増えることは当然のことのように考えられるが、これは、特筆すべきことである。なぜならば、受講後の自由記述に「前は、決められたこと、件名はここ、日付はここか指定されているものだけしかできなかったけれど、この授業で文書の構成が分かるようになった」と記述していたのは、商業高校の情報処理科卒業者で全国商業高等学校協会主催のワープロ実務検定2級保持者である。その学生でも、

「前は決められたことしかできなかった。この授業でビジネス文書の構成がわかるようになった。」と記述している。これは、短期大学の情報教育においては、「ワープロ検定」に合格させることはもちろん大切なことではあるが、それ以前に確かな知識として、ビジネス文書の構造を理解させ、自ら作成できるようにさせることではないかと考え授業を行っている。自ら作成できるようになれば自ずと、「ワープロ検定」にも合格できるようになると考える。これは高木⁴⁰⁾が、短期大学の教育の中で最も重要なことは、ビジネス文書という極めて技術的な色彩の強い題材を扱う場合であっても、それを通じて「ものの見方、考え方」を育成し、学生達の眼を社会に向けて大きく、正しく開かせることに他ならない、と指摘するとおりであるとする。また、ビジネス文書の構造理解に関しては、ビジネス文書構成要素の提示の仕方による成果と考える⁴¹⁾。

②ビジネス文書編集テスト

資料1 ビジネス文書編集テスト入力済みファイル

平成17年5月1日
 養護・保健コース
 保護者各位
 帝京短期大学
 キャリアサポートセンター長
 教員採用試験受験対策のご案内
 拝啓新緑の候 ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、本学では来年度に教員採用試験を受験する方を対象に、受験対策では有名な講師をお招きし教員採用試験対策講座を三週にわたって開催いたします。つきましては、下記内容をご検討いただきますようお願い申し上げます。
 敬具
 記
 1. 開催期間 8月6日～26日 9:00～18:00
 2. 会場 帝京短期大学
 3. 参加費 10,000円
 4. 定員 30名
 5. 申込方法 別紙を参照してください。
 6. 内容
 以上

資料2 ビジネス文書編集テスト完成例

平成17年5月1日
 養護・保健コース
 保護者各位
 帝京短期大学
 キャリアサポートセンター長
 教員採用試験受験対策のご案内
 拝啓 新緑の候 ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、本学では来年度に教員採用試験を受験する方を対象に、受験対策では、有名な講師をお招きし、教員採用試験対策講座を、三週にわたって開催いたします。
 つきましては、下記内容をご検討いただきますようお願い申し上げます。 敬具
 記
 1. 開催期間 8月6日～26日 9:00～18:00
 2. 会場 帝京短期大学
 3. 参加費 10,000円
 4. 定員 30名
 5. 申込方法 別紙を参照してください。
 6. 内容

期 日	内 容	講 師
6日～	一般教養科目	品川 陽子
13日～	専門教育科目	鈴木あきよ
20日～	総合全般	山田 義男

以上

情報基礎演習受講前後に、ビジネス文書の編集技能がどの程度身につけているか、確認するためのテストを実施した。そのビジネス文書編集テストの内容を資料1に、完成例を資料2に示した。ビジネス文書編集テストは、資料1に示す入力済みファイルを開き、資料2の完成例を見ながらビジネス文書の形式に、編集機能を使って編集し、完成させるものである。

ビジネス文書編集テストの採点方法を、資料3に示した。ビジネス文書の形式に構成要素を配置する方法は様々考えられるが、編集機能を使って効率よく編集できることは、限られた時間内に作成することにおいては、重要なことである。そのため、資料3に示す採点基準に従って、3点満点で採点した。

資料3 ビジネス文書編集テスト採点基準

- 1 発信日付や発信者、件名等を右揃えや中央揃えの機能を使って行える
 - 2 均等割付機能を使って、記書きを均等割付できる
 - 3 表作成ができる
- 上記1～3の個所につき、適切な機能を使用していない場合1点減点とする。

情報基礎演習受講前後の編集テストの中央値と平均とSDを表4に示した。

表4 2006年度情報基礎演習受講前後の編集テスト中央値、平均、SD

	受講前	受講後
中央値	1	3
平均	1.48	2.95
S D	0.93	0.22

(3点満点)

受講前と受講後では、中央値の間に5%水準で有意差が認められた。(z=-12.2805, p<.05) 受講後は受講前に比べ、中央値は高く、SDは小さくなった。

これらのことから、情報基礎演習を受講することによって、受講後には受講前よりもできるようになった、わかるようになったと学生自身が自己認識し、さらにそれは実際に編集テストの結果においても明らかとなった。

これは、以下に示す学生の自由記述からも読み取ることができた。

「今までほとんど使ったことがなくて、Wordという言葉が難しそうに聞こえていたが、今ではそうでもな

い、「普段は使う機会がなかなかない Word に最初は抵抗があったが、回数を重ねて出来るようになった」と記述していたのは、10分間の入力文字数が、入学当初から700文字以上ある学生である。このような学生であっても、使ったことがないアプリケーションソフトに関しては、「難しそう」、「抵抗があった」と感じることを考えると、入力において自信がない学生にとっては、その感じ方はより強いと思われる。

「今までは、とにかく打つのは遅いし、よくわからなくてパソコンその物が嫌いだったけど、早打ちの練習をしているうちにだんだん出来るようになっていったから自信がついた」、「私は日常でパソコンを使う機会がまったくなく、この授業が苦痛で仕方なかった。4月のころはキーボードを見て文字を入力するので精一杯だったが、やっていくうちにそれなりに文章も早くかつ正確に入力できるようになり、とてもうれしかった。」「今まで自分でうまくWordを使うことが出来ず、パソコンはすごく苦手な分野だったが、Wordが使えるようになり、自分にすごく自信がついた。」と受講後には記述していることを考えると、はじめは「嫌いだった」「苦痛だった」「苦手だった」ことが変容している。「少し文を打つてみるのが好きになった（パソコンも少し好きになった）」と記述していたのは、受講前の調査でコンピュータを使ったことがないと申告した通信制高校卒業生である。これらのことから本学の情報教育は、コンピュータを使ったことがなかった者にとっても、使ったことがあった者にとっても、コンピュータを嫌いにならない実践過程であったことが考えられる。また、「文字を打つことが楽しくなった。毎日の日課にしている」ので、少しずつではあるが力がついてきていると思う。「Wordを使ったことによって楽しくできたから自信がついた」「はじめてやった時は、分からないことだらけで、全然面白くないし、本当に大丈夫かなと思ったが、やっていくうちに分かることが多くなっていき、本当にWordを使うことが面白くなってきて、今では少し自信もついてきた」と記述されているように、いやいややらされているのではなく、楽しく学ぶこと、面白いと思うことは、学ぶ意欲が促進され、自信に繋がっていることが考えられる。

5. おわりに

本研究により、高等学校での教科「情報」も始まったばかりであり、様々な学生が入学していたことが明らかとなった。また、中学、高校でWordを使ったことはあっても、自信を持って使うまでには至っていないことも、情報基礎演習受講前の実態調査によって、明らかとなっていたことである。そして、中学や高校では、時間数などの関係により、全員にしっかりとした

知識や技術を習得させることが困難な状況であったとしても、短期大学で知識や技術の定着を図り、学生自身の中に「自信」という確かなものとして醸成することができたのであれば、今後もコンピュータに積極的、主体的に関わることが考えられる。

生涯学習の重要性が叫ばれ、学校教育においては、社会の変化に対応して、生涯にわたって学び続けるための自己教育力の育成が強調されている^{42) 43) 44) 45)}。本学の情報教育の実践過程が、コンピュータを使うことが嫌いであったり、苦手であったりすることを少しでも軽減させられたと考える。さらに、学生の自由記述の中の「自分は意外にも」や「自分でもすごいと思った」という表現から、自己認識の変容を、「今までになくやる気を持って出来た」という記述から自己教育力の醸成を、大きな文字で「もっと勉強したい」と記述されていたことから、これからも学び続ける意欲や姿勢を読み取ることができた。このことにより、本学の情報教育の実践過程は、学生の自己認識を変容させることができ、これからも学び続ける可能性を示唆することができたものと考えられる。

原田ら³³⁾の報告の中に、到達目標を明確にすることによって、学生は自分自身の習熟度を評価し、授業に対する参加意欲を上げやすくなるであろう、とある。本学の情報教育の実践過程は、学生の希望であり、本学の方針でもある「ワープロ検定取得」という目標が明確であったことが功を奏したと考える。

今後は、さらに上位級に合格できるように指導配慮していきたいと考える。

<参考文献>

- 1) 梶浦文夫：大学における2006年度からの情報リテラシー教育、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.205～208、主催 広島大学
- 2) 宮川祐一：人間学部における情報リテラシー教育-2006年入学生対策と結果、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.209～212、主催 広島大学
- 3) 西本実苗、田中規久雄：情報リテラシー科目に対する学生ニーズの統計的分析、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.227～230、主催 広島大学
- 4) 鈴木令子、山崎秀記：一橋大学における情報基礎教育とその環境、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.219～222、主催 広島大学
- 5) 山内美恵子：情報処理に対する学生の意識と現状、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.235～

- 237、主催 広島大学
- 6) 廣渡榮寿、棚次奎介、武藤直彦：高校「情報」必修化にともなう文科系情報リテラシー教育の課題—北九州市立大学文科系学部アンケート調査結果報告一、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.245～248、主催 広島大学
- 7) 横内滋里、片谷教孝、鳥養映子、林英輔：新教育課程によって入学者の初期条件はどう変わったか、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.249～252、主催 広島大学
- 8) 新ヶ江登美夫、泊羊子：大学新入生におけるコンピュータリテラシーの変化とその対応、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.253～255、主催 広島大学
- 9) 布施泉、岡部成玄：高校教科「情報」の履修効果とコンピュータ経験、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.259～262、主催 広島大学
- 10) 石川貴彦：保健福祉系大学における文書作成と表計算処理のリメディアル教育、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.292～295、主催 広島大学
- 11) 高井才明：大学文学部における初級レベルの情報教育のあり方について、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.312～314、主催 広島大学
- 12) 黒田登美雄、岡崎威：共通教育としての情報処理教育の見直しについて、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.325～328、主催 広島大学
- 13) 立田ルミ：新入生が入学以前に受けた一般情報処理教育の調査と結果、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.333～336、主催 広島大学
- 14) 根建洋子、洞田勝博：鹿児島純心女子大学における2006年度入学生の情報基礎力—過去4年間のデータとの比較による考察一、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.337～340、主催 広島大学
- 15) 中嶋輝明：2006年度入学生のパソコン利用経験と入学時のプレースメントテスト得点との関連性、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.341～344、主催 広島大学
- 16) 立野貴之、加藤由樹、加藤尚吾：普段のコンピュータ使用や高等学校での情報教育の経験と大学における情報教育の成績との関係に関する分析、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.345～348、主催 広島大学
- 17) 友永昌治、宮崎智絵、近藤武明、武井順介：大学情報リテラシー履修者のExcel習熟度と学習レリバンス、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.349～352、主催 広島大学
- 18) 宮崎智絵、友永昌治、近藤武明、武井順介：高校の出身校にみるExcel習熟度の相違、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.353～356、主催 広島大学
- 19) 林良雄、姫野完治、横田賢司、上田晴彦、石黒純一：教科「情報」を受けた新入生の実態調査について、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.367～370、主催 広島大学
- 20) 松本豊司、鈴木恒雄、佐藤正英、森祥寛：「情報処理基礎」の実践にみる教科「情報」の効果、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.379～380、主催 広島大学
- 21) 中尾剛、柴田和聖、渡邊景子：高等学校教科「情報」と情報リテラシーについて、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.385～388、主催 広島大学
- 22) 松山実、山口勝己、安井浩之：大学入学後の調査から見た高校「情報」の効果、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.389～390、主催 広島大学
- 23) 岡部成玄、布施泉：大学における一般教育としての情報教育の新たな展開、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.413～415、主催 広島大学
- 24) 伊藤博之：情報基礎教育科目の見直しについて—2年毎のカリキュラム改訂—、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.455～457、主催 広島大学
- 25) 松井透、赤松直、立川明：高知大学における全学ノートパソコン必携の情報教育(1)2006年入学生への対応、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.458～461、主催 広島大学
- 26) 赤松直、松井透、立川明：高知大学における全学ノートパソコン必携の情報教育(2)2006年入学生のスキル調査、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.462～465、主催 広島大学
- 27) 立川明、松井透、赤松直：高知大学における全学ノートパソコン必携の情報教育(3)2006年入学生と上級生との比較、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.466～469、主催 広島大学
- 28) 山田耕太郎：検定試験の受験結果から見た情報リテラシー教育、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.238～240、主催 広島大学
- 29) 杉野真紀：中等教育における情報教育の拡充に対応した短大教育のあり方について、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.256～258、主催 広島大学
- 30) 萱津理佳：短期大学入学時におけるパソコン利用状況の変化について、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.329～332、主催 広島大学
- 31) 野村卓志、原田茂治：高校新課程を経た学生に対する大学の情報リテラシー教育、平成18年度情報教育研究集会講演論文集、pp.371～374、主催 広島大学
- 32) 若林義啓、栢木紀哉、上田千恵、井原零：普通科高

- 校における教科「情報」実施状況に関する調査、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.375～378、主催 広島大学
- 33) 原田章、景村幸弘、菅澤拓生、中西通雄：大学の一般情報教育における教科「情報」の心理的影響、平成18年度情報教育研究会講演論文集、pp.381～384、主催 広島大学
- 34) 菊地紀子：情報教育における学生の意識調査、帝京短期大学紀要、8、pp.39～48 (1991)
- 35) 菊地紀子：検定試験結果からみた情報教育に対する一考案、帝京短期大学紀要、9、pp.45～51 (1993)
- 36) 菊地紀子：授業形態の違いによる情報教育の効果について、帝京短期大学紀要、10、pp.35～42 (1996)
- 37) 菊地紀子：日本語ワードプロセッサ検定試験合格の可能性と入力文字数の関係、帝京短期大学紀要、11、pp.47～51 (1999)
- 38) 菊地紀子：日本語ワードプロセッサ検定試験の級別合格率にみるハードウェア及びアプリケーションソフトとの関係、帝京短期大学紀要、12、pp.75～84 (2001)
- 39) 菊地紀子：短期大学入学以前のコンピュータ・リテラシーに関する研究、帝京短期大学紀要、13、pp.83～88 (2004)
- 40) 高木聖：ビジネス文書教育の実践的展開について－導入部の要点をめぐって－、東京工芸大学女子短期大学部紀要「飯山叢書」9巻1号、pp.80～96、(1992)
- 41) 菊地紀子、宮寺庸造、横山節雄：ビジネス文書構成要素の提示の違いによるビジネス文書構造理解度、日本教材学会研究年報第18巻、pp.227～234、(2007)
- 42) 天城 勲(1997)「学習：秘められた宝」ぎょうせい
- 43) American Library Association(2000)
「Information Literacy Competency Standards for Higher Education」
- 44) ぎょうせい(1997)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について中央教育審議会第二次答申」
- 45) 「若者の人間力を高めるための国民宣言」
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2005/10/h1004-1.html> 2006/2/22